

## 審査の結果の要旨

氏名 高田 恵子

天然由来の生物活性化合物は創薬リード化合物として有望視されており、現在用いられている医薬品の 7 割以上が天然由来化合物に関係している。それら天然由来化合物の探索源として、植物は、ゲノムサイズが大きいと、多様な化合物を取得できる可能性が期待されている。実際、多くの生物活性化合物が植物から単離されており、ケシの乳液からのモルヒネやタイヘイヨウイチイの樹皮からのタキソールを始めとする医薬品が生み出されている。しかしながら、近年、新規に発見される天然由来の低分子生物活性化合物は減少の傾向を示しており、植物においても新規化合物を取得する新たな方法が必要とされている。

一方で、植物から単離された低分子生物活性化合物の中には、植物で生産されにくいと少量しか得ることができず、その構造が複雑なため有機合成が難しい化合物も多く存在する。また、植物は生育に時間がかかり、生育条件により得られる化合物が変化するという難点もある。この点、植物培養細胞・培養根は原植物に比べ生育の速いものも多く、物理・化学的な培養条件のコントロールが容易であり、培養条件を最適化することによって収量の向上が期待できる。

しかしながら、ニチニチソウ(*Catharanthus roseus*)原植物では生産されている vincristine が培養根では生産されないように、原植物では生産されている化合物が組織培養では生産されない例も多い。これらの問題に対して、現在まで行われてきた植物培養細胞・培養根の代謝産物の誘導、生産量の向上のための方法は培養環境を変えることで遺伝子の発現を制御する試みであったといえる。それゆえ、植物培養細胞・培養根には多くの発現していない遺伝子が残されていると考えられ、現在までに開発されてきた方法が、十二分にその潜在能力を引き出しているとは言い難い。それゆえ、植物培養細胞・培養根の代謝産物の誘導、生産の向上のための新たな方法が必要とされている。

高田恵子は、植物培養細胞・培養根において、エピジェネティクスの制御により、植物培養細胞・培養根の発現していない遺伝子の発現の誘導により、新規化合物や有用な既知化合物の生産を促すことができると考え、HDAC 阻害剤である suberohydroxamic acid (SBHA)を用いて、ヒストンの脱アセチル化の阻害によりユークロマチンの割合を高め、人為的に植物培養細胞・培養根の遺伝子の転写を活発にすることで、化合物の生産を促す方法の確立を目指した。

まず、高田はボタン (*Paeonia suffruticosa*)、アマチャ (*Hydrangea macrophylla* var. *thunbergii*)、ミシマサイコ (*Bupleurum falcatum*)、サンショウ (*Zanthoxylum piperitum*)、シャクヤク (*Paeonia lactiflora*) の計 5 種の培養細胞とヤマトリカブト (*Aconitum japonicum* var. *montanum*) の培養根に 500  $\mu$ M SBHA を添加した NK 培地 (Murashige and Skoog 培地、 $\alpha$ -naphthylacetic acid 1 mg/L、kinetin 0.1 mg/L)、もしくは非添加の NK 培地にて 4 週間培養し、それぞれの培地と培養細胞もしくは培養根のメタノール抽出液について、HPLC (UV 210 nm 検出) により、SBHA 添加および非添加の条件で生産される化合物の変化を確認した。SBHA を添加して培養した 6 種の植物のうち、アマチャとミシマサイコの培養細胞、ヤマトリカブトの培養根において不添加の培養細胞、培養根と比較して新たな化合物の生産が確認された。

## 1. ミシマサイコ培養細胞

### ミシマサイコで SBHA により生産が誘導された化合物の単離

ミシマサイコの培養細胞のメタノール抽出物を HPLC 分析を指標に各種クロマトグラフィーにより精製し、SBHA の添加により新たに生産された化合物 **1-4** を得た。質量分析、各種 NMR 解析と文献値から化合物 **1-4** の構造を Fig. 1 のように決定した。このうち、化合物 **2, 3** は新規化合物であり、mishimalignan A および B と命名した。

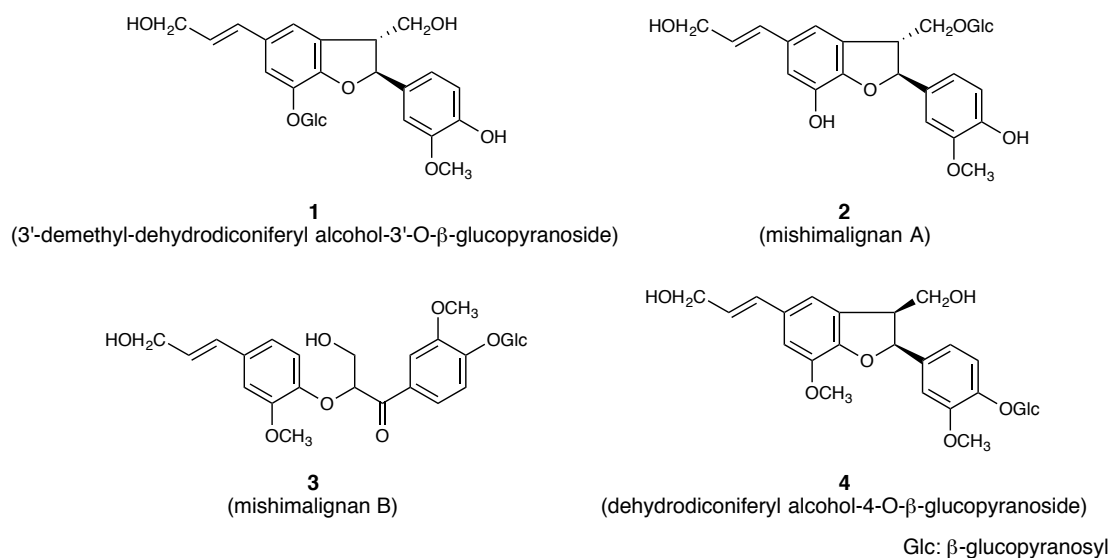


Fig. 1. Structures of compounds **1-4**

### 化合物 **1-4** の最適生産条件の検討

ミシマサイコの培養細胞を SBHA の添加濃度を 150-1500 μM まで、培養期間を 2-6 週間まで変化させて培養した。化合物 **2** と **3** は SBHA の終濃度 150 μM のとき、化合物 **1** と **4** は SBHA の終濃度 500 μM のとき、生産量が最高であった。化合物 **1** 4 週間、化合物 **2-4** は 6 週間の培養を行ったとき、生産量が最大であった。

### 化合物 **1-4** の植物ホルモン調節による生産の検討

SBHA による生産の誘導の特異性を確かめるため、代表的なストレス応答ホルモンであるジャスモン酸メチル (MeJA)、サリチル酸 (SA)、アブシシン酸 (ABA) による化合物 **1-4** の誘導の可能性について検討した。MeJA 0.075-0.75 mM を添加した培地では化合物 **2, 4** の生産が確認された。ABA 0.38-38 μM を添加した培地では、再現性の良いデータは得られなかった。SA 0.5-5.0 mM を添加した培地では化合物 **1-4** の生産は確認されなかった。

## 2. ヤマトリカブト培養根

### ヤマトリカブト培養根で SBHA により生産が誘導された化合物の単離

SBHA によって 16 個のピークの誘導が確認された。ヤマトリカブトの培養根のメタノール抽出物を HPLC 分析を指標に各種クロマトグラフィーにより精製し、SBHA の添加により約 37 倍に生産が向上した化合物 **5** を得た。質量分析、各種 NMR 解析と文献値から化合物 **5** の構造を magnoflorine と同定した。また、精製の過程で、既知化合物 **6-13** を得た (Fig. 2)。

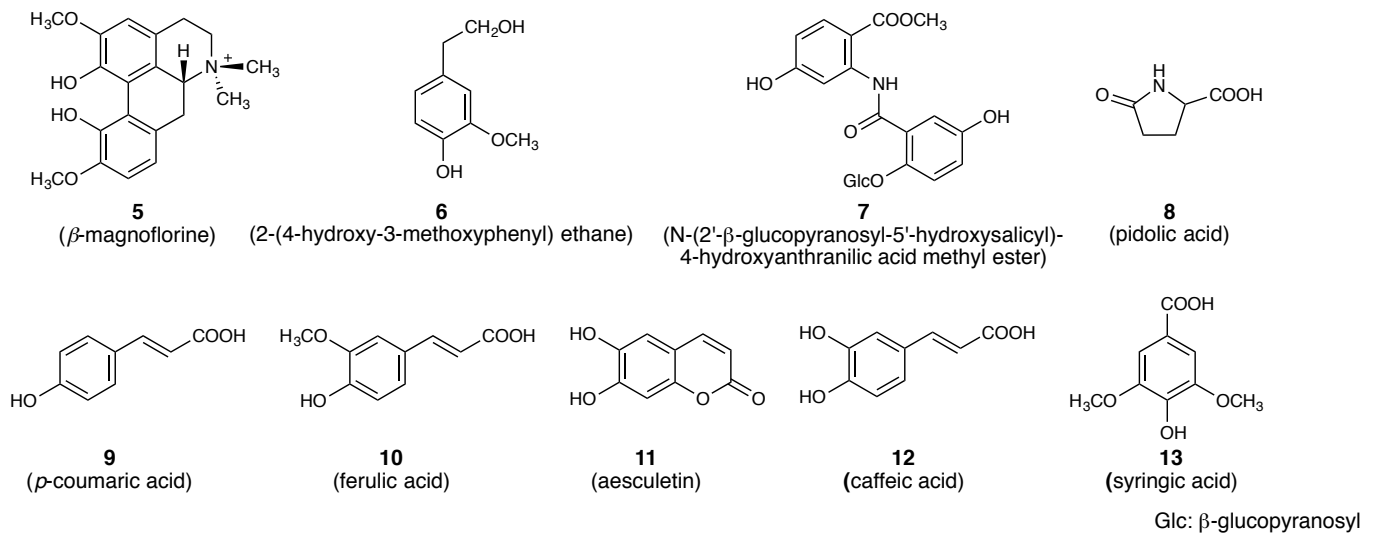


Fig. 2. Structures of compounds **5-13**

### 化合物 **5** の最適生産条件の検討

ヤマトリカブトの培養根を SBHA の添加濃度を 150-1500  $\mu\text{M}$  まで、培養期間を 2-6 週間まで変化させて培養した。生産の誘導が観測されたピークのうち、化合物 **5** は SBHA の終濃度 500-1500  $\mu\text{M}$  で 4 週間の培養を行ったとき、生産量が最大であった。SBHA の添加により新たに生産されたピーク 16 本全体でも、500-1500  $\mu\text{M}$  SBHA、4 週間の培養で高い生産量を示した。

### 化合物 **5** の植物ホルモン調節による生産の検討

MeJA、ABA、SA を添加した培地を用いて、ストレス応答ホルモンによる化合物 **5** の誘導の可能性について検討した。このうち、MeJA 0.075-7.5 mM を添加した培地では化合物 **5** の生産は観測されなかった。ABA 0.38-38  $\mu\text{M}$  を添加した培地では、化合物 **5** の生産が確認されたが、再現性の良いデータは得られなかった。SA 0.5 mM を添加した培地では、化合物 **5** の生産が確認された。SBHA によって誘導された 16 本のピークのうち 5 本のピークは MeJA によって、8 本のピークは ABA によって、3 本のピークは SA によっても誘導された。この結果より、SBHA はストレス応答ホルモンとは違う生合成経路を誘導することが示された。

以上、高田恵子は 6 種の植物について SBHA による化合物の生産誘導を試み、3 種の植物で SBHA 不添加の培養細胞、培養根と比較して新たな化合物の生産を確認した。また、新規化合物の取得にも成功したことより、SBHA の添加が新規化合物の取得に有用であることを示した。さらに強い抗菌活性をもつ既知化合物についても生産量の向上を示した。植物からの生物活性化合物の探索・利用において、この方法を用いることで、多様な遺伝子をもつ植物の潜在能力を引き出し、新たな生物活性化合物が発見・利用されることが期待され、薬用資源学、天然物化学に寄与すると考えられる。

よって本論文は博士（薬学）の学位請求論文として合格と認められる。